

腎癌肺転移巣手術症例の検討(転移性肺腫瘍, 第22回日本呼吸器外科学会総会)

著者	小澤 雄一郎, 山本 達生, 伊藤 博道, 酒井 光昭, 石川 成美, 鬼塚 正孝, 榊原 謙
雑誌名	日本呼吸器外科学会雑誌
巻	19
号	3
ページ	372
発行年	2005-05-20
権利	日本呼吸器外科学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00135023

O-149 腎癌肺転移手術症例の検討

¹筑波大学附属病院 呼吸器外科, ²筑波大学 臨床医学系外科

小澤 雄一郎¹, 山本 達生², 伊藤 博道¹, 酒井 光昭²,
石川 成美², 鬼塚 正孝², 榎原 謙²

【はじめに】腎癌は他臓器に血行性転移をきたしやすく、また発見時に多発転移である場合が多い。遠隔転移臓器では肺がもっとも頻度が高く腎癌肺転移に対する全身療法は未だ確立しておらず、切除を選択する場合がある。【目的】当科における腎癌肺転移の手術症例を検討することにより、その病態を明らかにし外科的治療の適応を検討する。【対象および方法】1994年4月から2004年12月までに当科で切除した腎癌肺転移手術例21例について、年齢、性別、原発巣手術から転移巣の出現までの期間 (DFI)、転移部位、転移巣数、術式、術前術後治療の有無、予後について検討した。【結果】年齢:48歳~79歳 (平均65.8歳)。性別:男性17例, 女性4例。原発左右別:左9例, 右7例。DFI:0~192ヶ月 (平均48.7ヶ月)。60ヶ月以上5例。転移部位:右11例, 左8例, 両側2例。転移巣数:単発13例, 多発8例 (2~6個)。術式:partial resection17例, segmentectomy2例, lobectomy3例。【結語】腎癌肺転移に対して積極的な外科的切除により予後の改善が期待できると考えられる。また術式は同時性・異時性多発転移を来す傾向が強く、肺機能を温存するような縮小手術が望ましい。原発巣術後5年以上経過し転移巣が発見される症例も多く、長期的定期的なフォローが必要である。